

月刊やちまなこ

2015.12.15 発行

No. 217

12月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



湿原散歩

師走に入り、湖に薄氷が張り始め、水鳥たちもいつの間にか姿を消した。時折湖面を走るようにキュキューンといった音が聞こえ、湿原に冬の訪れを告げているようだ。枯れたヨシ原は風が吹くたび、うねるように揺れ、まるで大海の波を思わせる。しばらくすると、その波間をヒヨドリの一群が通り過ぎていった。



コッタロ川と湿原のほとりから

186 12月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住. 中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

暖冬です！風のプレリュードを待たずして突如降り積もった11月24日20cm余りが丹頂の第2コツ&タロを迎えた光景を御覧下さい。“初雪や丹頂照らす夜明哉”。ところが、師走に入ってから



本日（10日）迄に積もる程の雪は降っておらず、12月3日の大雨があれよ、と見る間に洗い流してしまい、草地をはじめ山も湿原も地肌がむき出しになっております。そんな中、元気に移動するまっ黒い毛並みの獣がいて“冬枯れの湿原深く分け入りてアメリカミンク帰化増殖す”の昨今です。

ところで、年々加速している温暖化によると見られる異常気象で、予測が難しい天候の変化に戸惑うのは人間ばかりではありません。未だ生暖かい秋の如き

コッタロでは、少し狂わされた様なエゾ鹿の雄叫びが続いていたり、近年増加傾向にあるエゾ狸の面々のメタボ現象も不思議な兆候と云えましょう。

エサとなる植物や小動物（ネズミやミミズ等）が余程豊富な証と考えられ、ここ4～5日は、日没後の軒下に3頭が現れて、丹頂等のエサ（トウキビ）を横取りしているではありませんか。これほど太ったエゾ狸はこの20年間見たことがありませなんだ。



一方、恋の季節の北狐等は、ほぼペア形成したものと見られ、時折庭をうろつく単独狐を見つけて“木に高く鳴きつつカラスおじぎする地上を見れば北狐行く”。

さて、これからの本格的な寒波に備え、我家のバードレストランには、たっぷりの脂身とヒマワリの実、リンゴにミカン等々常連野鳥及び旅鳥達用の「おそなえ」が欠かせず、早くも賑わい始めているのが四十、五十、ハシブト雀と7～8羽の赤ゲラに混じって「ヤマゲラ♂」は早朝から飛来し、喧しい鴨におどされ乍らもサッササッサと脂身で空腹を満たして飛び去ります。この魅力的な体色の彼が一日も早く♀を伴って来てくれることを期待せずにはられませんね。



残すところ羊年も20日余りとなりましたが、どちら様も2016年が羊にもまサル良い年となりますように・・・。

湿原の住人たち その177

一年を通して見られるハシブトガラは体長12.5cmとスズメより小さく、シジュウカラやゴジュウカラと同じカラの仲間です。エコミュージアムセンターを起点とする塘路湖畔歩道でもよく観察できる鳥のひとつで、昆虫やクモ、果実を求めて、木々の枝先を飛びまわっています。白、黒、グレーの体色、黒いベレー帽が特徴のハシブトガラは、日本では北海道にのみ生息しています。動きが早い鳥ですが、冬は餌台にも来るので観察しやすくなるでしょう。

ハシブトガラ



クリスマスを演出する飾りを作りました！

自然ふれあい行事「クリスマストピアリーを作ろう」を5日に開催しました。トピアリーとは植物を人工的、立体的に形づくる造形物のことです。今回はリボンを変えれば一年中飾れるので、松ぼっくりや木の実・草の実を使って、球形のボールにグルーガンで張り付けて作りました。オアシスを鉢の形に切る時やどこから見ても球に見えるようにすることが一苦勞でした。皆さん真剣な眼差しで、上手に自然の恵みを組み合わせていました。暴風雪の被害で折れた湖畔歩道の枝やカラマツの実、ツツジも利用して、高さ30cmほどの作品が完成しました。素材の松ぼっくりやホオズキを届けてくださった方々に感謝します。



つぼっちの塘路湖周辺うろうろ日記 Vol.83

「フィトンチッドの森の木橋が新しくなりました！」

フィトンチッドの森遊歩道は平成8年に完成し、来年で20年目を迎えます。遊歩道は総距離536mで、西側はオムナイ川や湿地のある低地、階段挟んで東側はなだらかな緩斜面が続く林の中を通ります。近年遊歩道西側にある木橋が傷んできていましたが、先日歩くと新しい橋に架け変わっていました。

この時期のフィトンチッドの森は穏やかで静かです。樹々の葉も落ち遠くまで見渡すことが出来ます。早速新たな発見がありました。2つ目の木橋を越えた先、階段手前にできた南側に折れる作業道を確認！。通っていくと殖民軌道阿歴内線（戦前前後活躍した馬力鉄道）の路線跡に出ました。一見するとただの土盛りですが、かつて路盤だった場所には大きな樹木が生えません。まさしく樹々に覆われたトンネルのように通路が続いていました。

坪岡 始（標茶町郷土館学芸員）



